



Title	相談室こぼればなし
Author(s)	
Citation	大阪大学大型計算機センターニュース. 1974, 15, p. 96-96
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/65256
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

相談室こぼれなし

プログラム相談室は内科の診療所のようなものです。患者さんは大低消化不良とか、風邪ひきのようなものでおいでになり、一寸した処置だけで回復してゆかれます。併し、個々の相談を超えてグローバルに眺めてみると、ユーザーの計算機の生理に対する無関心さの故か、彼をあまりにも酷使しすぎるケースが多いようにみえています。それは、個々のプログラムにとつてはささいなことかも知れませんが、大勢のユーザーの共同利用という圧力の下では、あたかも大気汚染にも似た害毒となってゆくのです。

商業ベースではコンピュータの利用には相当高価なコストを見なくてはなりません。コンピュータの費用は、大別してプログラミング・コストとコンピュテーション・コストに分類できましょう。面白いことに、この二つは一方が上ると、他方は下がるという相補性があります。だから自分でプログラムを組めるユーザは、できるだけ重複を避け、無駄を排したものを作り、コンピュテーション・コストを下げるために様々の創意と工夫をこらせます。それは、ユーザのパテントとして財産化することすらあるのです。これに反し、大学の計算コストが比較的安価であるのと、プログラム自身には業績的価値があまり認められないことが相俟って、プログラム・コストが節約される余り、計算コストの抑制には関心が払われていないように思われます。計算コストの無駄な上昇は、無論、計算時間の無駄な消費と同義です。

最近、ターン・アラウンド・タイムが長きに過ぎるとの不満をしばしば耳に致します。センタ業務の合理化を図ることの必要を否定する積りはありませんが、この原因には、プログラム側にもその責任の大半があることを、ユーザは認識しなくてはいけません。大学の計算センタのようなひろい共同施設によって受益する以上、マシンの生理を熟知し、彼に無理をしいて、それにより他のユーザに迷惑をかけるというようなことをできるだけなくする創意工夫をこらすことは、ある意味では、ユーザのひとりひとりの義務であろうと思います。これは単に、応用科学者のみならず、基礎科学を志すものにとっても、否、一層重要な倫理ではないでしょうか。（W）

